

看護学生が捉えた母性看護の視点 — 母性看護学概論・母性看護学援助論の授業終了後の調査 —

木下 照子*・谷野 宏美

新見公立大学看護学部

(2014年11月19日受理)

母性看護学(母性看護学概論・母性看護学援助論)の授業を終えたときはどの程度学生が母性看護学を理解できたかということが重要である。これらの授業を通して、学生はどのように母性看護を捉えているかに関心を持った。そこで授業内容や授業方法について参考資料とすることを目的に、学生が母性看護の視点をどのように受け止めているかを調査した。結果、カテゴリー化されたものは<母性看護の対象及びその背景>、<母性を促し支える看護>、<母性看護の課題や役割>、<母性看護に必要な知識と技術>の4つであった。学生の母性看護の視点につながる教育内容を考慮する必要性が示唆された。

(キーワード) 母性看護学, 学生, 母性看護学概論, 母性看護学援助論

はじめに

母性看護学は生涯を通じた性と生殖の健康の維持や増進、疾病予防を基盤とし、次世代の育成を目指している。学生が行う母性看護の展開において、疾病を持たず比較的健康な人を対象としているが、学生は他の看護領域に多い問題解決思考に慣れ親しんでいる。したがって、母性看護に対する苦手意識や特殊な概念を持っている学生も少なくない¹⁾。並木によると、「母性看護はイメージがつきづらい対象の看護という点で、母性看護は特殊であるという先入観を持ちやすい」²⁾とある。異常分娩であっても生理的現象である妊娠、分娩を経る対象に対して、問題志向のみで関わることなく妊娠期、分娩期、産褥期の各期を通してのケアは健康の概念を核としたウェルネス思考による視点での看護が重要である。そこで、講義終了後に調査し、学生の捉えた母性看護の視点について明らかにすることにより、今後の講義や演習、臨地実習における教育内容を考慮する上での資料とする。

I 母性看護学の教育目的・目標(母性の講義概要)

1. 母性看護学概論

- 1) 母性看護の基盤となる概念として対象者の特性を理解し、それを取り巻く社会の現状を把握し母性看護に必要な看護技術や役割と課題を捉える。
- 2) 女性のライフステージ各期における看護を理解しプロダクティブヘルスの視点から母性の健康課題とその

ケアを学ぶ。

2. 母性看護学援助論

- 1) 母子を取り巻く社会的背景を踏まえながら、周産期を中心に身体的、心理的、社会的変化を理解し必要なケアについて学ぶ。
- 2) 妊娠期、分娩期、産褥期、新生児期にわたり継続的な看護について理解し、各期における保健指導の必要性やセルフケアの指導の重要性を理解する。

II 研究目的

母性看護学概論、母性看護学援助論を受講した後、学生が母性看護の視点をどのように捉えたかを明らかにする。

III 研究方法

調査期間：2012年2月

調査対象：A大学看護学部の母性看護学概論、母性看護学援助論を受講した2年次生64名。

調査内容：母性看護学概論、母性看護学援助論全ての授業終了後に「母性看護とは」について自由記述とした。

分析方法：研究協力の得られた者の記述を精読し、意味・内容をコード化した。コードの類似性に基づき質的帰納的に分類しサブカテゴリー化し、さらにカテゴリー化を行った。信頼性確保のために、サブカテゴリー化、カテゴリー化の段階において、研究者間で同意が得られ

*連絡先：木下照子 新見公立大学看護学部 718-8585 新見市西方1263-2

るまで検討を重ねた。また各カテゴリー別に単純集計を行った。

倫理的配慮：研究対象者である学生には、「学生が母性看護をどのような視点をもって母性看護を捉えているかを明らかにし、講義や演習内容に活かせる」目的であることを記述し、研究参加への承諾用紙に本研究の目的と、研究の意義や研究の方法、結果の公表についても確認した。研究協力は自由意思によるもので、記述された内容はコード化し個人が特定されることはないこと。また成績とは無関係であること、研究に協力しない場合でも不利益はないこと、研究協力は撤回が自由であることを記述した文章を配布し口頭で説明した。更に書面で研究に「同意する」「同意しない」の選択できるよう記述し、提出を依頼した。「同意する」としたものを研究対象とし「同意しない」の選択したものは対象から除くとした。なお本研究はA大学研究倫理審査会の承認を得ている。

IV 結果

調査配布者64名、そのうち研究協力者60名(93.8%)から得られた266件のコードを抽出した。それから更に分析し21のサブカテゴリーが抽出され、4カテゴリーが形成された。以下カテゴリーを【 】としサブカテゴリーを< >とした。

【母性看護の対象およびその背景】について79件(29.9%)のコードからなり、サブカテゴリーの7つは<妊娠期・出産期・産褥期を通しての女性>、<健康な人を対象とすることがほとんどである>、<胎児を含む>、<新生児と母親・父親>、<夫(パートナー)>、<家族>、<母親を取り巻く周囲の人々>であった。

【母性を促し支える看護】としてはコード77件(28.9%)

であり、サブカテゴリーの4つは<妊婦が理想とする出産ができること>、<自立を促し見守る>、<母親・父親を含めた家族のケア>、<生命の誕生に関わる機会がある>であった。

【母性看護の課題や役割】はコード63件(23.7%)であり、サブカテゴリー4つは<対象に応じた保健指導>、<看護者は援助できるよう知識技術を修得する>、<サポートできる能力と体制>、<女性の一生のライフサイクルに関わる>であった。

【母性看護に必要な知識と技術】はコード47件(17.7%)であり、サブカテゴリー3つは<正しい知識の提供>、<命を守る技術>、<家族・地域社会における女性のための環境>であった表1に示す。

V 考察

1. 母性看護の対象およびその背景

母性看護の対象は、生涯を通じての性と生殖に関する女性の健康を守るという観点である。学生は女性と生殖のパートナー、育児のパートナーとしての男性、子どもが生まれるという家族、その家族を育てる地域社会などについて学び、母性看護を考えると対象およびその背景を意図して母性看護を捉えている。母性看護学では健康な人を対象とすることがほとんどであるが、妊娠期・出産期・産褥期を通しての女性(母親)を取り巻く周囲の人々を中心に、胎児、児と母親・児と父親、夫(パートナー)、家族を対象とし妊娠から産褥に限らず妊娠前から退院後にいたるまでと考える学生や、妊娠に限らず女性の一生を通して対象として捉えている者もある。このように母性看護学の科目の学習により母性看護の対象およびその背景から母性看護の視点が捉えられている。

2. 母性を促し支える看護

妊娠、分娩、産褥、新生児において、安全で安楽な経過を送るためのサポートが必要である。それは女性の生活スタイルや役割が変化してきたことにある。医学の進歩・発展といわれながらも少子化など母子をめぐる生活環境の変化、家族形態の多様化や近年の社会環境の変化に伴い母性看護の役割も拡大してきている。学生は対象が健康と称されていても様々なサポートを必要とされていると捉えている。また社会的弱者である子どもや母親、女性家族の立場に立った個別性の支援が必要であり、対象者の自立を促す看護が母性看護の視点としている。近藤らによる「学生が捉えた母性観」に母性を促し支える存在としての看護師であり、母性を引き出すための働きかけが挙げられていること³⁾と同様である。妊婦が理想とする出産ができることや妊婦の自立を促すことがまさしく母性を促し支える看護であるとしている。

表1 学生が捉えた母性看護の視点

カテゴリー【4】	サブカテゴリー <21>	コード 266
母性看護の対象及びその背景	妊娠期・出産期・産褥期を通しての女性	79 (29.7%)
	健康な人を対象とすることがほとんどである	
	胎児を含む	
	新生児と母親・父親	
	夫(パートナー)	
	家族	
	母親を取り巻く周囲の人	
母性を促し支える看護	妊婦が理想とする出産ができること	77 (28.9%)
	自立を促し見守る	
	母親・父親を含めた家族のケア	
	生命の誕生の機会であり産婦と共に喜ぶ	
母性看護の役割	対象に応じた保健指導	63 (23.7%)
	女性のライフサイクルに関わる	
	看護者は対象者に援助できるよう知識・技術を習得し提供する	
	女性を取り巻く環境でサポートできる体制作りをする	
母性看護に必要な知識と技術	正しい知識の提供	47 (17.7%)
	命を守る技術	
	家族・地域社会における女性のための環境づくり	

3. 母性看護の課題と役割

看護者は母性看護の現状を様々な統計資料から幅広く把握することが必要である。また、他機関との連携や、保健指導、サポート体制がどのようなものであるかなど、的確な情報を活用できることが必要である。そして対象に応じた保健指導ができることであり、看護師は役割を担うために知識技術の修得が必要である。更に女性のライフサイクルに関わるには幅広く学ぶことが課題であり、また看護者の役割を担うためにも必要である。学習途上である学生は、母性看護の課題や役割に沿った学習が必要であるとしている。母性看護は対象である妊婦（産婦、褥婦、新生児を含む）およびその家族を捉え、理解することで保健指導の重要性を学ぶことができている。またウェルネスの視点を生かし、保健指導及び対象者のセルフケアやサポート体制の必要性を学んでいる。また事例を用いての対象理解や保健指導の演習、モデルを活用しての体験学習等から対象の理解をしている。臨地実習においても活用できるよう役割を捉えている。

4. 母性看護に必要な知識と技術

母性看護には確かな知識と技術が必要でありそれを提供できることが看護である。それは命を守る環境づくりを示していることでもある。女性の受精から成熟までの形態や機能の特性と変化を学び、女性を含む家族のライフスタイルの変化や母性の継承における特性を学ぶことが必要であるととらえている。並木ら母性看護学実習前の戸惑いとして「母性看護の技術が未熟」が要因であると指摘している⁴⁾。本研究においても母性看護の技術として正しい知識・命を守る技術が看護の視点としての重要性は類似したものと考えられる。山口は母性看護学に苦手意識を感じた学生は全体の62.3%とし、学年次として2年次としている⁵⁾。それは『覚えることが多い・覚えにくい』とある。本研究対象と同様な年次であり、授業が学生にとってわかりやすさが重要な課題であるといえる。教材や学習内容に苦手意識を生じないように配慮することが母性看護の視点を強化できることであると考えられる。

このように学生は授業後に捉えている。今後、母性看護学実習後の母性看護の捉え方に変化が見られるか課題である。

文献

- 1) 山口静江：母性看護学に対する苦手意識の形成要因と軽減要因。第43回日本看護学会論文集－母性看護－，84-87，2013.
- 2) 並木紀子，小関由美子，松下万里子他：母性看護学実習における看護学生の達成感と戸惑い・特性不安との関係，第36回日本看護学会論文集－母性看護－，113-115，2005.
- 3) 近藤邦代，小玉ひとみ，松宮良子：母性看護学実習で学生が捉えた母性観の様相－母性看護学実習後のレポートの分析を通して－. 第43回日本看護学会論文集－母性看護－，88-91，2013.
- 4) 前掲2)，133
- 5) 前掲1)，86